

一

次の――線部の読みをひらがなで答えなさい。

- ① あまりの高さに怖じ気づく。
- ② 恰幅がいい中年男性。
- ③ 海原を進む船。
- ④ 国家の繁栄を祈念する。
- ⑤ 賄賂を受けとつてはいけない。

二

次の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① 金銭のスイトウ簿を毎日つける。
- ② 悪党を一網ダジンにする。
- ③ 同窓会のカンジになる。
- ④ なぞの呪文をトナえる。
- ⑤ 信用をソコなうようなことをしてはいけない。

三

次の①～⑤の俳句の空欄にあてはまる言葉を、それぞれ次より選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一回しか使えません。

① 秋の蚊の□□と来て人を刺す

② □□と竹に音あり夜の雪

③ □□と窓に日のさす五月哉

④ □□と草花植し小庭哉

⑤ 堀割の道□□と落葉哉

ア こてこて イ さらさら ウ じくじく エ よろよろ オ うすうす

四

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

白河院の御時代、天下に殺生禁断のお触れがあった。魚鳥の類はなおのこと、一疋の虫をさえ殺めてはならないという厳しい制札が、津々浦々に建てられていた。それを捕えたものは重い刑罰に処せられることが、人々の心を痛めた。それゆえ漁師をはじめ虫売りまでが商い道を変えたほどであった。天下には魚や鳥の類がなかった。

ただ美しい小鳥は家々の軒や庭樹に、^{ほしきまな}擅に啼き立ち、魚はその（ a ）（ 肌を池や河の上に浮べ、雲のいろさえ平和な日がつづいていた。家の中へ飛び込んだ小鳥でさえも、誰一人として捕るものがなかったのである。

そのころ、貧しい興義という僧が、ある荒れた山里深くその母と住んでいた。もとより落葉の深い山里のことゆえ、ときどき村人の訪ねてくるほかは、絶えて人の来るけはいさえなかった。僧は、朝晩の勤経と、少しばかりの菜畑とにいそむ外は、母親と寂しいながらも心許した暮しをしていた。町へ出ようとせず、人に会おうとせず、いつも寂落として（ b ）（ 僧侶であった。ある日ふと母親は床についてから、もう起きるちからさえなかった。興義は、夜昼となく看護していたが、ふとある日、母親はこう言つて興義の顔をしげしげと見詰めた。

「このごろどうしてわたしにお魚をつけてくれないのか。わたしがどんなにお魚が好きだということを知っているお前が、そして病氣だというのにどうしてつけてくれないのでしょうか。」

「町へ出てでも不漁で魚が出ていないのです。明日にでも出たらきつと新しいのを買つて参りましょう。」

興義は、そう言つて辛い気がした。殺生禁断のお触れが出たことは、母親は知らなかったばかりでなく、へ
A 〽。な
ぜだといえば、母親はへいぜいから魚類がなければ食膳に^{むか}対わなかったからである。

「こんなによい日和なのに、不漁とは、おかしいの。」

「いえ、山は静かでも海は荒れている日が多うございますから。」

興義は、そのとき母親がしずかに帰り花の咲いている、寂しい秋の樹を見上げているのを見ると、ひどくやつれているのを痛々しく眺めた。

「今年は何という小鳥の多い年でしょう。あんなに珍しい小鳥が沢山に止っているではないか。」

「ほんとに沢山いるようですね。」

興義は、何となく居辛い気がした。しかしその片鱗をさえ捕ることを禁ぜられているのを、どうして魚を捕ることができよう。

——興義は、さまざまな考えに心乱れていた。いつそひと思いに裏の池の魚を捕ろうかと思ったが、それも禁札があるのでどうにもならなかった。

二

興義はある日町じゅうを歩いて、魚の干物でもないかとさがしていたが、どの店にも一尾の魚すらいなかった。魚屋は店を閉じ、鳥屋は、往來の止り木をさえ焚いてしまっていた。

興義がある街角へ来たとき二人づれの男が、検非違使庁へ引かれてゆく——そのうら寒い姿を見た。一人は魚を釣った咎で、一人は小鳥を打ったためであつた。かれらはその魚と小鳥とを手につげ、それを誰人にもよく見えるようにさせた役人は、うしろから取縄を持ち、声荒らげて呼んでいた。

「鳥や魚を捕るな。魚を捕るものは、われらがひっ捕えるのだ。」

町の人々はその声に恐がった。そればかりでない。役人はうしろから竹の根の鞭で罪人をひしひし打ち叩いていた。罪人はそのたびにその肩さを震わしながら、疼痛のために咽んでいた。

かれらの一行がきたとき、興義は、人込みのうしろにいたが、役人は、すぐ見付け出して、

「僧よ、生きものを捕えるものはこのように処置される。おん僧こそまことにこんな罪を犯される方ではない——却って地獄へ

の道もこの通りだと微笑まれるであろう。」

そう言うと、黙つてうつつ向いている興義の前を通り過ぎた。興義は、魚をさげた罪人のうす暗い姿を見つめていると、なぜか、それが自分の背中のように思われてならなかった。自分も魚を捕ればあなるのだと、^③そう浅猿しい考えが湧いた。

夕方、寺へかえると、母親はそれに待ちくたびれていた。母親に会うのがつらくてならなかった。——母親は、興義を見るとすぐ声をかけた。

「どんなお魚がありました。ちよいと見せて下され。」

興義は、^④それを楽しそうにしている母親を悲しげに凝視めた。

「いえ、魚はきょうも町にはなかったのです。どこをさがしても一尾もいませんでした。雑魚すらも。」

母親はすぐ失望した。そして力のない眼をして、

「どうしてでしょう。風はなし、鳥さえ渡っているのに、魚が海へこないということはないだろうに。」

「やはり不漁なんです。しかし明日こそはどうしても見つけてまいりましょう。どうか明日まで待つて下さい。」

興義はそういうと、實際魚をたべさせないと、もう余命のない母親の栄養を摂ることができないのを心辛く感じた。

「そうか、では明日にの。」

母親はそれきり何もいわなかった。拙味いものばかりで母親の衰えは目に増すばかりであつた。明日はどんなにしても魚を捕らなければならぬと思った。——興義は、永い秋夜をいろいろ考えながら眠れなかった。心では禁制を犯すことさえいまは詮方ないことだと思つた。

三

興義は蒼い池の上を眺めていた。

魚はさまざまな肌を、たとえば青や紅や赭や黒や、あるものは耀やく銀鱗を波間にひるがえしていた。あるものは行列をつく

り、美しい雁行をつらねていた。またあるものは一しきりになり、ひれと尾とを震わせ、泳ぎ澄ましていた。またあるものは岸べの泥に頭をこすりつけていたり、ふいと水面へ浮んで（　　）羽虫を啄んだりしていた。凡ては静かで穏かな、波紋一つない玲瓏とした池心に、ただ青い空が映っているばかりだった。まれに岸べの葦の茎がちんだり伸びたりしながら波紋のまにまに映っていた。

興義には、そういう物静かな風景が、どれほど悲しく心に映ってくるかを試めす人のように、永い間石上に踞して眺めていた。母親の喜びそうな魚はあまりに美しい肌と生きのよい鱗をもっていた。母のからだにちからを増すための、いさぎよい魚介は、目の前でさまざまな形や、いろいろな泳ぎようをして見せていた。——興義は、あたりを見廻した。しかし山里深いこのあたりでは、誰一人見ているものすらなかった。それでも彼は十分あたりを見廻してから、ふところから釣糸を取り出した。

⑤「おれの望むのは唯の一尾だ。おれはそれで母をたすけなければならぬ。」

興義は、釣糸を池のそこ深く垂れた。釣糸は静かに水を切つて沈んだ。——興義のうしろには白河院の魚鳥禁断の札が、あたかも興義の左肩のところをさし覗くように、まだ新木の鋭い黄色を光らせていた。

釣糸は動いた。興義は間もなく一疋の上物を釣り上げた。そしてからだが震えるのを押えながら寺へかえた。——久しく乱れなかった池の中は、何となく魚介のそうぞうしさが、こもっているように見えた。

母親はよろこんだ。そして日に日にちからを増し、病いもよくなった。そのかわり興義の顔色はわるかった。そして池の魚はもうかぞえるほどしかなかった。

「わたしもだいたいぶ元氣になりました。しかしお前の顔いろはどうしてそんなに悪いのでしょうか。」

母親はそう言ったが、興義は黙つてものを言わなかった。

母親は起き上られるようになったころ、興義は、床中に蒼ざめた顔をうずめていた。

母親は、ある日、池のそばへ立つてふと殺生禁断の制札を見たとき、始めて興義がこの池から魚を捕ったこと、国の掟を犯したことを知った。そして興義がそれを気に病んでいることを考えあてた。

しかし母親は興義へそのことを話さずに、魚を釣りその肉と骨とからの汁ばかりを興義に与えた。興義はすこしずつよくなった。しかしこの親子はどちらからも、そのことを生涯口にしなかった。——ただ池のなかには間もなく、この親子が投げ入れる多くの飼のために、魚は肥り数を殖して行つたのである。

（室生犀星「禁断の魚」より。一部表記をあらためた。）

問一 (a) (b) (c) に入る適当な言葉をそれぞれ次より選び、記号で答えなさい。

ア 飛び交う蚊かのような イ 青い虹にじのような ウ 秋風の中に坐すわっているような エ 車軸しやじくを流すような

問二 へ A へ に入る適当な言葉を次より選び、記号で答えなさい。

ア 興義もそれを知ろうとしなかった。

イ 興義もそれを知らなかった。

ウ 興義もそれを口にできなかった。

エ 興義もそれを守らなかった。

オ 興義もそれを気にとめもしなかった。

問三 次の例文中の 線部「の」と同じ用法のものを、本文中の 線部アより一つ選び、記号で答えなさい。

〈例文〉

支度たぐのないのはお互いさまさ。

問四 線部①「商い道を変えた」ことが具体的にわかる一文を文中より探して、最初の五字を答えなさい。(読点・符号も一字と数える)

問五 線部②「やつれている」のは誰ですか。文中より探して答えなさい。

問六 線部③「浅猿あさしい考えが湧いた」とあるが、この時の興義の気持ちを説明したものとして、最も適当なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア わずか一尾の魚を捕ったばかりに、検非違使庁の役人から鞭で打たれる罪人へのあわれみ。

イ 自分と母親の空腹を満たすために、殺生禁断の法を破つても魚を捕ろうというやさしさ。

ウ 表向きは検非違使庁の役人に同調しながらも、実際は魚を捕ろうとしているしらじらしさ。

エ 僧である自分は絶対に魚など捕ることができないのに、そんなことを想像する自分への情けなさ。

オ このままではいずれ魚を捕つてしまい、実際に罪人として処罰されてしまうだろうというおそれ。

問七 線部④「それ」の指し示す内容を、文中の言葉を用いて十五字以上二十字以内で答えなさい。(句読点も一字と数える)

問八 線部⑤「おれの望むのは唯の一尾だ」とあるが、この時の興義の気持ちを説明したものとして、最も適当なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 殺生禁断のお触れを破りたくはないがやむを得ない事情があり、仕方がないのだと自分に言い聞かせている。

イ かたくなに守ってきた僧としての戒律を破り、これからは俗人として生きていこうと決心している。

ウ 自分が魚を釣るのは商いのためではなく母の命を救うためで、人の道に外れるわけではないと思ひ込んでいる。

エ たとえ魚を釣ったところを見とがめられたとしても、たった一尾なので見逃してほしいと思っている。

オ いたずらに魚鳥の命ばかりを大切に、人の命を全くかえりみない時の権力者に反発している。

問九 ―線部⑥「肉と骨とからの汁ばかりを興義に与えた」とあるが、なぜ「母親」は興義に「肉と骨とからの汁ばかり」を与えたのですか。その理由として、最も適当なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 床中に蒼ざめた顔をうずめるほど、息子のからだはすっかり弱ってしまっているので、せめて汁物ならば喉の通りがよいだろうと考えたから。

イ 一目で魚だとわかる料理だと、母親も禁を破ったことが興義にはつきりとわかってしまうので、また余計な心配をかけてしまっから。

ウ 僧である興義は、魚鳥を口にすることが禁じられているので、形状のわからない汁にして、なんとしても栄養をとらせる必要があったから。

エ 病み上がりの母親には、手の込んだ料理をする体力がまだないので、調理方法の簡単な汁物ぐらいしか作ることができなかったから。

オ 二人は荒れた山里深くに住んでおり、満足な食材が手に入らないので、具材本来の味の引き立つ汁物が適当だと考えられたから。

問十 ―線部⑦「――ただ池のなかには間もなく、この親子が投げ入れる多くの飼のために、魚は肥り数を殖して行ったのである」とありますが、ここで筆者はどのようなことを表現していると考えられますか。その説明として、最も適当なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 戒律を破り続け、魚を食べ続けたことを描くことで、親子が仏教の教えにそむき、かえって自由に幸福に暮らしたということとを表現しようとした。

イ 親子が投げ入れる餌によって魚が殖えたことを描くことで、自然の摂理の偉大さを表現しようとした。

ウ 親子が餌を投げ入れ、魚が肥え太ったことを描くことで、見つからないかぎりは何をしても良いということを表現しようとした。

エ 魚を釣れば釣ただけ魚は減るはずなのに、逆に殖えたことを描くことで、世の中には矛盾したことがおこるということを表現しようとした。

オ 禁は破ったが結果的に池の魚の殖えたことを描くことで、親子の情愛は法では縛れないほど深いものであるということを表現しようとした。

五

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

解剖をするのも、虫の標本を作るのも、派手な作業ではない。いつてみればごく地味な手作業である。

虫の標本といっても、私の場合には虫が小さい。虫なら小さくてあたりまえだろう。そうはいっても、カブトムシとノミではずいぶん大きさが違う。私が作っている標本は、ノミのサイズが普通だから、単純に昆虫針を虫に刺せばいいというものではない。ではどうするか。白い厚紙を三角に切つて、その先端に糊で虫を貼る。紙の先をわずかに曲げて接着面を作り、そこに虫の横腹を貼り付ける。そうすれば、小さい虫の背腹両面が観察できる標本となる。

この作業をするためには、まず紙を三角に切らなくてはならない。たまたま家内と有馬温泉に行く機会があり、温泉に入った後は、もっぱらハサミで三角の紙を切っていた。そうしたら、まるで傘張り浪人じゃないの、と家内がいう。虫の標本を作ったところで、金にならない。他人に作ってもらえば手間賃を払う。作業自体は辛気くさい。いわれてみれば傘張り浪人の風情である。そういう手作業をしながら、ブツブツ文句をいう。それでこういうタイトルになった。^(注)これでは元氣が出ないが、日常やっていることだから、少なくとも現実感はある。

こうして切った紙に昆虫針を刺す。なにしろ数が多いから、これもはなだ面倒くさい。あるとき息子が暇そうにしているから、やらせてみた。白い紙に針を刺したものを、発泡スチロールに刺して並べる。ある程度できあがったら、息子は無名戦士の墓ができたと言った。これも氣勢が上がらない点が、傘張り浪人に似ている。いい若い者が墓を並べていても仕方がない。それっきりでその後は頼んでいない。

なぜ傘張りが好きか。それはよく訊かれる。死んだ母親というと、そのことばかり想いだす。そんな、虫ばかり見て、なにが面白いの。母はよくそう訊いた。だからこちらは、ほかの人たちは生きていてなにが面白いのか、と子どもの頃から思っている。人間同士とは、なかなか相互理解がむずかしいものである。

こういう作業が「学習」になるということを、最近よく思う。子どもが①こういうことをしなくなったことに、問題はないか。

学習とは文武両道である。両道とは二股を掛けていくということで、それぞれべつべつにという意味ではない。脳というなら、知覚と運動である。知覚から情報が入り、運動として出て行く。出て行くが、運動の結果は状況を変える。その状況の変化が知覚を通して脳に再入力される。こうして知覚から運動へ、運動から知覚へという、ループが回転する。そうしたループをさまざまに用意しモデル化すること、これが学習である。

たとえば散歩をする。一歩歩くごとに視界が変化する。その変化に合わせて、次の一歩を踏み出す。幼児はこうして自己の動きと知覚の変化、その関連を学習する。成人はこうした変化をあまりにも当然と思っているために、それをまだ学んでいない状態、あるいはそれができない状態を想像することがない。

(中略)

いったんそうしたループができてくれば、それはモデル化されるから、ゆえに応用が利く。つまり脳内に運動制御のモデルが発生するのである。現実には身体運動は複雑であり、きわめて多くのモデルを用意する必要がある。しかし、なにこともまずはじめなければ、話にならない。赤ん坊はそれをほとんど白紙の状態からはじめるのである。

右のような意味で、言語は典型的なループである。複雑な筋運動で構成された発声が、つぎに自分の聴覚で捉えられる。その間こえ方によって、ふたたび筋運動を調整する。その意味では言語であれ歩行であれ、脳における大ざっぱな原理は同じである。

これが「学習」だということは、強調されなくてはならない。なぜなら現代では、たとえば乳幼児教育用のビデオすら存在するからである。まだ寝たままの乳幼児に、ビデオを見せておくという。これが入出力のループになっていないことは、ただちに理解されるであろう。身体とは無関係に、勝手に視界のなかの事物が動く。それを私は学習とは呼ばない。^②これはある種の経験ではあるが、学習ではない。

乳幼児が自分の手をしげしげと眺めている。そうした光景は、人によっては見覚えがある。その手を乳幼児はいろいろに動か

す。その動きと、動きの感覚が、視覚に起こっている変化と連合する。こうして乳幼児は身体と視覚の関係を理解していく。最終的にはそれが自己の認識につながっていくとしても、私は不思議とは思わない。

私が大学に入ろうとしていた頃、つまりいまから半世紀近く以前、世間には大学に入ると馬鹿になるという「常識」があった。そういう記憶が残っている。あなたは大学に行くというが、大学に行くと馬鹿になるよ。こうしたことをいうのは、世間で身体を使って働いている人たちだった。そうした発言の真の意味は、いまではまったくわからなくなってしまったと思う。座って本を読んでいると、生きた世間で働くのが下手になってしまう。これはそういう意味だったはずである。その人たちの労働とは比較にならないが、こうした記憶があつて、私はいまでも傘張りをする。身体を多少でも動かすのである。

いま世間では、教育をどうするかという議論が盛んである。そのなかに、大学に行くと馬鹿になるというのはないであろう。高校全人どころか、大学全人になりそうな勢いである。座って机の前で学べることもたしかにある。しかし応用が利くことは「身についた」ことでしかありえない。教養教育がダメになったのも「身につく」ことがないからであろう。教養はまさに身につくもので、座って勉強しても教養にはならない。ただ勉強家になるだけである。それを昔は「量が腐るほど勉強する」といった。それでは運動制御モデルは脳のなかにできてこない。

なぜ身につかないか、それははつきりしている。情報化時代だからであろう。情報とは停まったもので、生きて動いている存在ではない。テレビのニュースは、ビデオにとつておけば、百年経つても見ることができる。あれは一見動いているように思えるが、その意味では停止している。それを情報というのである。あらゆる発言は、テープにとれば停まっている。いくらでも繰り返し聞くことができるではないか。しかしニュースを語るアナウンサーは、百年後には死んでこの世にいない。発言者は自分の発言をそのとおり繰り返すことはできない。かならず微妙に違つてしまう。生きることとは、再び取り返しがつかない時間を通過することである。通過していく主体は、二度と同一の状態をとることはない。だからすべては X なのである。

教育がそれを忘れて、もはや長いこと経つらしい。現代は情報化社会であり、おおかたの人々はそれでよしとしている。それでも結構だが、そのときに忘れてならないことは、情報は固定しているが、人は生きて動きつづけているということであろう。情報

が変化していくのではない。われわれが変化していくのである。それを諸行無常という。鐘は剛体だから、いつ聞いても同じ振動数で鳴る。つまり同じ高さの音がする。それが違つて聞えるのは、人の気持ち微妙に異なってくるからである。それを忘れた世界では、「生きがい」などという妙なものが話題になる。人が変わつていくそのことが、微妙な味わいを持つ。それが諸行無常の響きであろう。

Y。多くの人がそう思つて生きているらしい。そんなもの、意識がそう主張しているだけである。すべては移り変わるが、それを引き起こしているのは自分自身である。それを忘れて、「生きること」が成り立つはずがない。人間は情報とは違う。停止しているわけではないのである。

学問とは情報の取り扱いである。つまり生きたものを停め、停めたものを整理する作業である。そこに大学に行くと馬鹿になるという言葉の真意がある。それなら経済学が役に立たなくて当然である。経済学説は停止しているが、世間は動いているからである。医者は患者の検査結果しか見ない。患者は生きて動いているから、面倒くさいのであろう。いまどきの若い医師は診察が終わるまで、パソコンの画面と紙しか見ていない。それが患者さんの文句である。それは当然で、大学では「医学」を教えるからである。経済学と同じで、そこには「生きた人間」、つまりたえず変化する、奇妙で複雑なもの、そんなものが入り込む余地はない。ほとんどの医師は、論文を書くとする。学位を貰うためには、それが必要だからである。さらにそうした論文を書くのがもつとも得意な人が、大学では偉い医師になる。しかし論文をいくら集めても生きた人にはならない。そんなことはあたりまえであろう。論文はそのまま停止しているが、患者は生きて動いているからである。

生きた人間を扱っている人を、そろそろ昼間に提灯でも灯して探し回らなくてはいけない時代になつたらしい。教育とはまさに生きて動いていく人間を扱うことだからである。子ども以上に変化の激しい人間はない。^④情報化社会の人がなぜ教育が不得意か、以上でおわかりいただけると思うのだが。

(注)『中央公論』連載タイトル「鎌倉傘張り日記」。

(養老孟司『まともな人』より)

問一 ―線部「もっぱら」の意味として、最も適當なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 一人で イ 静かに ウ ちまちま エ 気ままに オ ひたすら

問二 ―線部①「こういうこと」とはどういうことですか。その内容として、最も適當なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 人間同士の相互理解をはかること。
 イ 与えられた課題をこなすこと。
 ウ 勉強と運動を両立させること。
 エ 面倒で時間のかかる手作業をすること。
 オ 親子で協力して工作すること。

問三 ―線部②「これはある種の経験ではあるが、学習ではない」について、以下の①・②の問いに答えなさい。

①「学習ではない」とあるが、「学習ではない」作業とは、何をどうすることですか。次の空欄に入るように、これより後の本文から二十字以内で抜き出しなさい。(読点・符号も一字に数える)

_____こと。

②「学習ではない」といえるのはなぜですか。その理由として、最も適當なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 知覚の変化と自己の動きを連動させることはできても、自ら立つて移動できないから。
 イ 言語が未発達な赤ん坊は、画面を見ているだけではビデオの内容を理解できないから。
 ウ 動かずに画面を見るだけでは、知覚と運動が相互に関連づけられないから。
 エ 視界のなかの映像が先行して動くため、常に身体は受動的な動きをしてしまうから。
 オ 乳幼児が身体と視覚の関係を理解するためには、第三者の補助が不可欠だから。

問四 ―線部③「大学に入ると馬鹿になる」の意味を、筆者はどのようなこととしてとらえていますか。その説明として、最も適當なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 大学では自分の好きな授業を選択できるため、偏った知識しか身につかず、就職しても学んだことが全く役に立たないというこ
 うこと。
 イ 座って本ばかりを読んでいると、知識は増えるが働く気がなくなるため、世間に出て身体を使った仕事をしなくなるというこ
 うこと。
 ウ 情報化時代の労働は身体を動かすことが少ないため、昔のような肉体労働で学んだ知恵や効率的なやり方を忘れてしまうとい
 うこと。
 エ 大学では学問以外の活動が盛んになるため、本業をおろそかにし、畳が腐るほど勉強することがなくなるということ。
 オ 大学では固定化した情報しか扱わないため、日々動いている社会に応用できる教養が身につかなくなるということ。

問五

X

にあてはまる四字熟語を次より選び、記号で答えなさい。

ア 一朝一夕 イ 一期一会 ウ 一長一短 エ 一喜一憂 オ 一進一退

問六

Y

に入る言葉を、次より選び、記号で答えなさい。

ア 俺は何者だ イ お前は何者だ ウ 俺は俺だ エ 俺はお前だ

問七

――線部④「情報化社会の人がなぜ教育が不得意か、以上でおわかりいただけと思うのだが」とあるが、情報化社会の人はなぜ教育が不得意のですか。五十字以上六十字以内で説明しなさい。(句読点・符号も一字に数える)

問八 本文全体をふまえて、筆者の考えに合致しているものを、次より一つ選び、記号で答えなさい。

ア 勉強によつて得られた知識や情報が増加すれば、応用の利く教養が内在化する。
 イ 言語であれ歩行であれ確実に身につけるためには、幼児期に学習することが望ましい。
 ウ 経済学は統計などのデータを扱う点で、生きた人間を扱う「医学」と大きく異なる。
 エ 赤ん坊も成人も、入出力のループがモデル化されるという学習システムは変わらない。
 オ 情報化した現代では、日々変化する情報を処理していく「生きた人間」が求められる。

